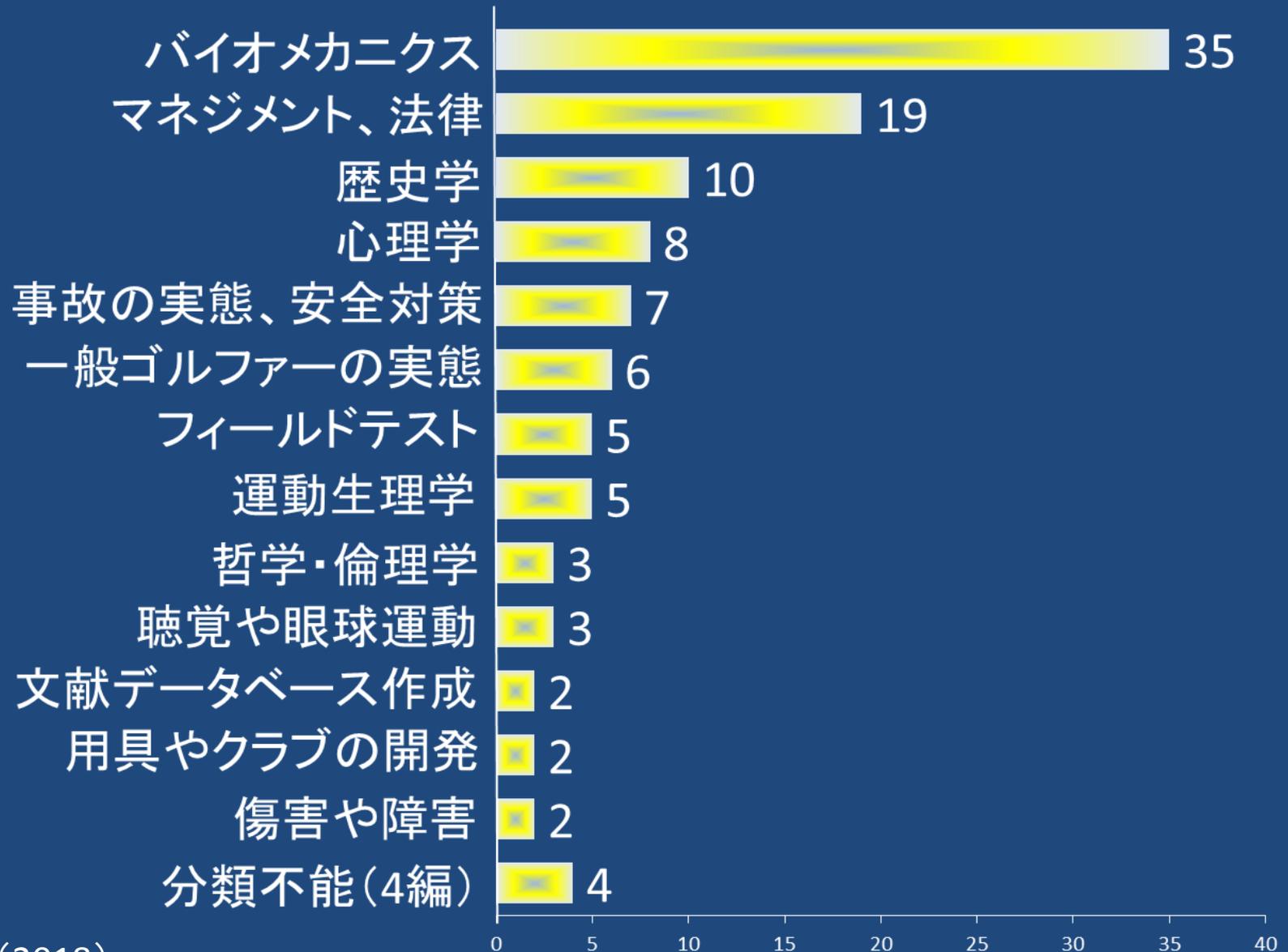


# 新規・継続・再開ゴルファーを獲得 するためのアクションリサーチ

北 徹朗  
(武蔵野美術大学)

# 昨年(於:熊本)の学会大会発表スライド(北徹朗)より



北 徹朗(2018)

「ゴルフの科学」掲載論文の特徴: 日本ゴルフ学会はこの30年で何を明らかにしてきたのか?

## Golf & Health

The Project has sought to raise awareness of the health benefits of golf in order to increase participation among golfers and non-golfers, improve the public image of the sport and increase support for golf in the political arena.

As a partner in the World Golf Foundation, The R&A has played a key role in the activity, notably supporting the work of researchers at the University of Edinburgh – fronted by lead researcher Dr Andrew Murray, the Chief Medical Officer for the European Tour.

The Golf and Health work has been supported by a number of leading golf figures past and present, including Gary Player, Annika Sorenstam and Padraig Harrington.

LONDON  
DECLARATION



RESEARCH  
REVIEW

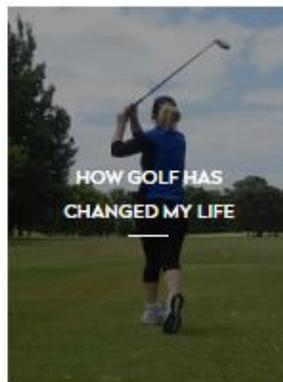


STRENGTH  
BALANCE

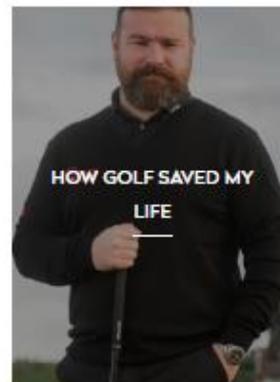


## Case Studies - Golf & Health

HOW GOLF HAS  
CHANGED MY LIFE



HOW GOLF SAVED MY  
LIFE



FROM TENNIS TO  
TEES - AN  
INSPIRATION FOR  
DISABILITY GOLFERS





# GOLF AND HEALTH



## 1 Golf and Physical Activity

- Aerobic**  
Moderate intensity for most people
- Muscle strengthening**  
More research required
- Spectating**  
Research required

## 2 Golf can provide moderate intensity physical activity using a golf cart or walking the course

**MORE health benefits by walking the course**

- 3.5 METs	- 4.8 METs
- 6000 steps	- 11000-17000 steps
- 4 miles	- 4-8 miles
- 600kcal/18 holes	- 1200 kcal/18 holes

## 3 Physical activity is associated with reduced risks of chronic conditions

HIP FRACTURES	-36 TO 68%
DIABETES	-30 TO 40%
CVD, STROKE	-20 TO 35%
COLON CANCER	-30%
DEPRESSION/DEMENTIA	-20 TO 30%
BREAST CANCER	-20%

## 4 Golfers live longer



Golfers live longer compared to non-golfers

## 5 Golf and Physical Health

Cancer	Cardiovascular	Musculoskeletal	Respiratory
Regular PA → ↓ risk colon/ breast cancer Skin cancer → wear sunscreen, protective clothing, seek shade	Golf can improve known risk factors for CVD Consult a doctor before playing golf if unstable cardiac symptoms present	Incidence of injury moderate, injury rate per hour low. Back, elbow and wrist most common. Improved balance and strength in older adults	Regular participation in golf → improved and maintained lung function in older adults

## 6 Mental Health and Wellness

Golf has wellness benefits

↑ self esteem, self worth, self efficacy

Golf and mental health needs more research.

Murray, AD, Daines L, Archibald, D, Schiphorst, C, Hawkes, R, Kelly, P, Grant, L, Mutrie, N. British Journal of Sports Medicine 2016 www.golfandhealth.org



# GOLF SPECTATING AND HEALTH



- Physical inactivity is responsible for more than 3 million deaths worldwide and may kill more than smoking
- Walking provides physical, mental and social health benefits
- More than 10 million people spectate at golf tournaments each year. They are not restricted to a seat, but can walk around the arena
- Golf spectators at the 2014 Ryder Cup collectively walked 4 times around the world
- Shenzhen Open spectators collectively walked the length of the Great Wall of China 7 times
- 2016 Paul Lawrie Matchplay spectators walked a mean of: **11,589 steps**
- At PLM, 82.9% met daily physical activity recommendations while spectating
- At PLM, over 60% expressed an interest in becoming more physically active post event
- FURTHER RESEARCH: How can we encourage spectators to become more active post-event?

SOURCE: Murray, A, Archibald, D., Scott, H, et al. BMJ Open SEM 2017. @GolfAndHealth

# The First International Congress on Golf & Health (第1回ゴルフと健康に関する国際会議)

2019.01.07

「ゴルフと健康」に関する国際合意2018 – 第1回ゴルフと健康に関する国際会議 –

ニュース



北徹朗

## INTERNATIONAL CONSENSUS ON GOLF & HEALTH

The 2018 International Consensus on Golf and Health highlights what we know about golf and health, and what actions by players, facilities, the industry and decision makers can maximise health gains from golf, and minimise health issues.



# The First International Congress on Golf & Health (第1回ゴルフと健康に関する国際会議)

「7th International Society for Physical Activity and Health Congress (ISPAH)」内の企画として2018年10月17日～18日にロンドンで開催

ISPAH内の「ゴルフと健康プロジェクトチーム」によって共同で開催されR&Aが後援

## 「ゴルフと健康に関する国際合意2018」

British Journal of Sports Medicine Volume52, Issue 22 (エジンバラ大学、Andrew D Murrayら)



## 話題提供の主旨

多くの先行研究からは「ゴルフは心身の健康に寄与する適度な運動」であることは明らかであるし「ゴルフをやってみたい」と考えている層も一定数存在するが、定着せず離反者も多いのはなぜなのか。

これまでのゴルフ人口増加に関する提言は、エビデンスをベースにしたものというよりも、コンサル的な提言が多く、それらは目を惹く内容ではあるものの、社会や企業がそれらのアイデアを取入れることは少なく、定着が難しかった印象は否めない。

こうした反省からも、紙面上のみの提言ではなく、＜研究→実践→研究→実践＞を繰り返すアクションリサーチが必要だろう。要するに、権威ある立場から、お題目的に提言を「言いつ放し」することではなく、それを地道な活動によって根付かせる研究実践家（アクションリサーチャー）が待望される。このような前提を軸足に置き、ポスト2020へ向けた話題提供をしたい。

# <日本のゴルフ場>

国土面積の約0.7%

森林面積の約1.0%

関東1都6県に600以上のゴルフ場が集中  
森林面積に占める割合も約3.7%



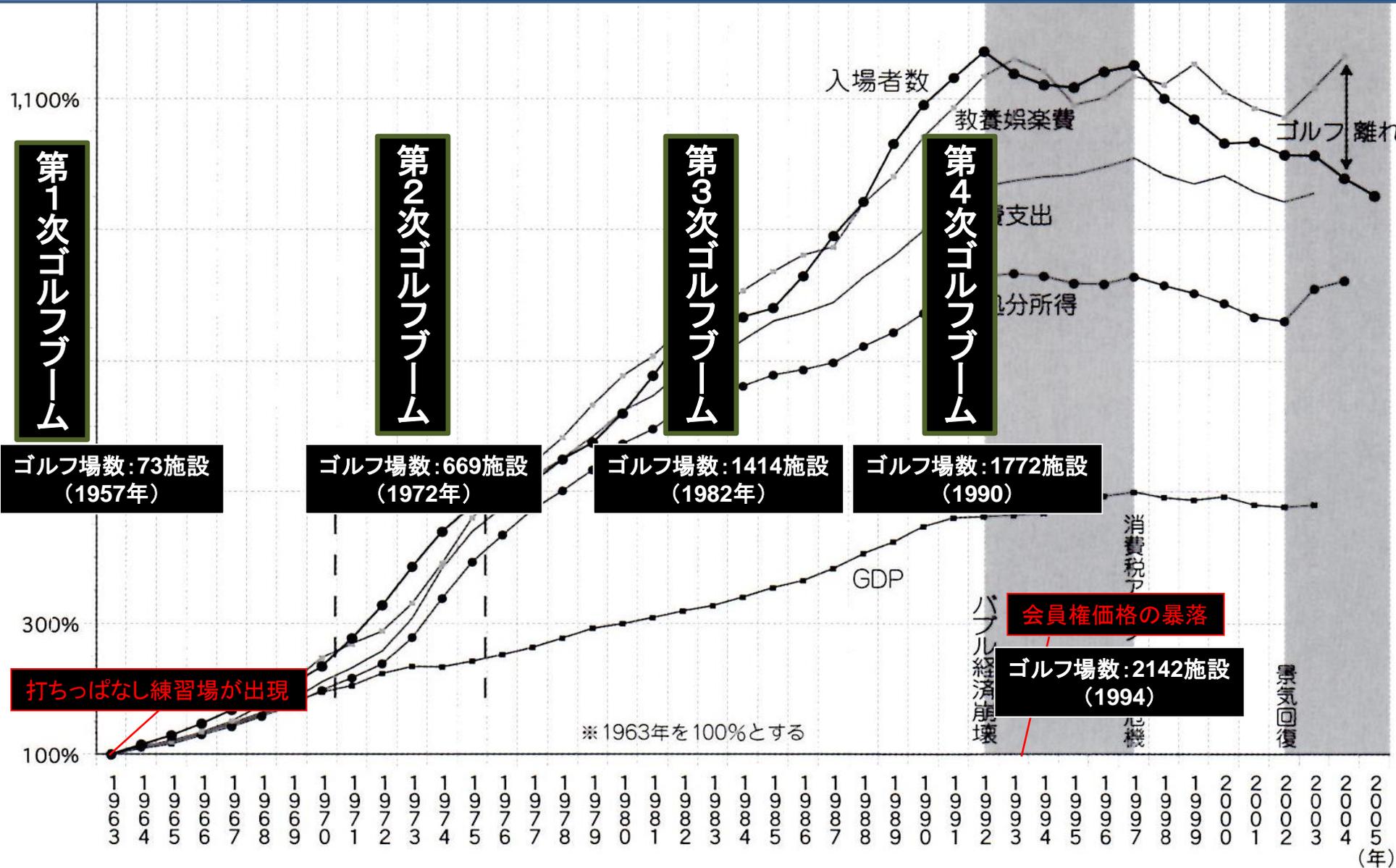
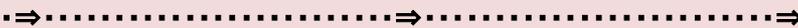
2035年までに、全国で約1000、首都圏で  
約150のゴルフ場の経営が立ち行かなくなる

<齋藤修(2012)余剰ゴルフ場、一季出版>

英国型の『特権階級プライベートクラブ』の模倣

米国型ゴルフの発展

日本型ゴルフの芽生え



# 日本のゴルフ人口

1992年 約1480万人

20年後



2012年 約 790万人

現在、約670万人(2018年)

## 政府や産業界の取り組み(1)

2003年 「ゴルフ市場活性化行動計画検討会」を組織  
(経済産業省委託調査)



『ゴルフ市場活性化行動計画検討委員会報告書』を発表

### 報告書におけるゴルフ人口回復・市場活性化の提言

ゴルフ人口が減少し高齢化する中、ミドル層(30代・40代)や女性層、ジュニア層などのマーケットを開拓し、ゴルフ市場へ取り込んで行くための提言が示された

## 政府や産業界の取り組み(2)

2003年 「ゴルフ市場活性化行動計画検討会」を組織  
(経済産業省委託調査)



『ゴルフ市場活性化行動計画検討委員会報告書』を公表



2004年 「ゴルフ市場活性化委員会」(略称:GMAC)の設立

### GMAC参加団体

日本ゴルフ協会、日本ゴルフ場経営者協会、日本パブリックゴルフ協会、日本ゴルフ用品協会、全日本ゴルフ練習場連盟、日本ゴルフジャーナリスト協会、日本プロゴルフ協会、経済産業省、有識者委員

# 日本のゴルフ人口

ピーク時	1992年	約1480万人
現 状	2018年	約 670万人



様々な提言や取組が功を奏していない  
(ゴルフ人口減少が止まらない)

## 「ゴルフ離反者研究」の必要性と目的

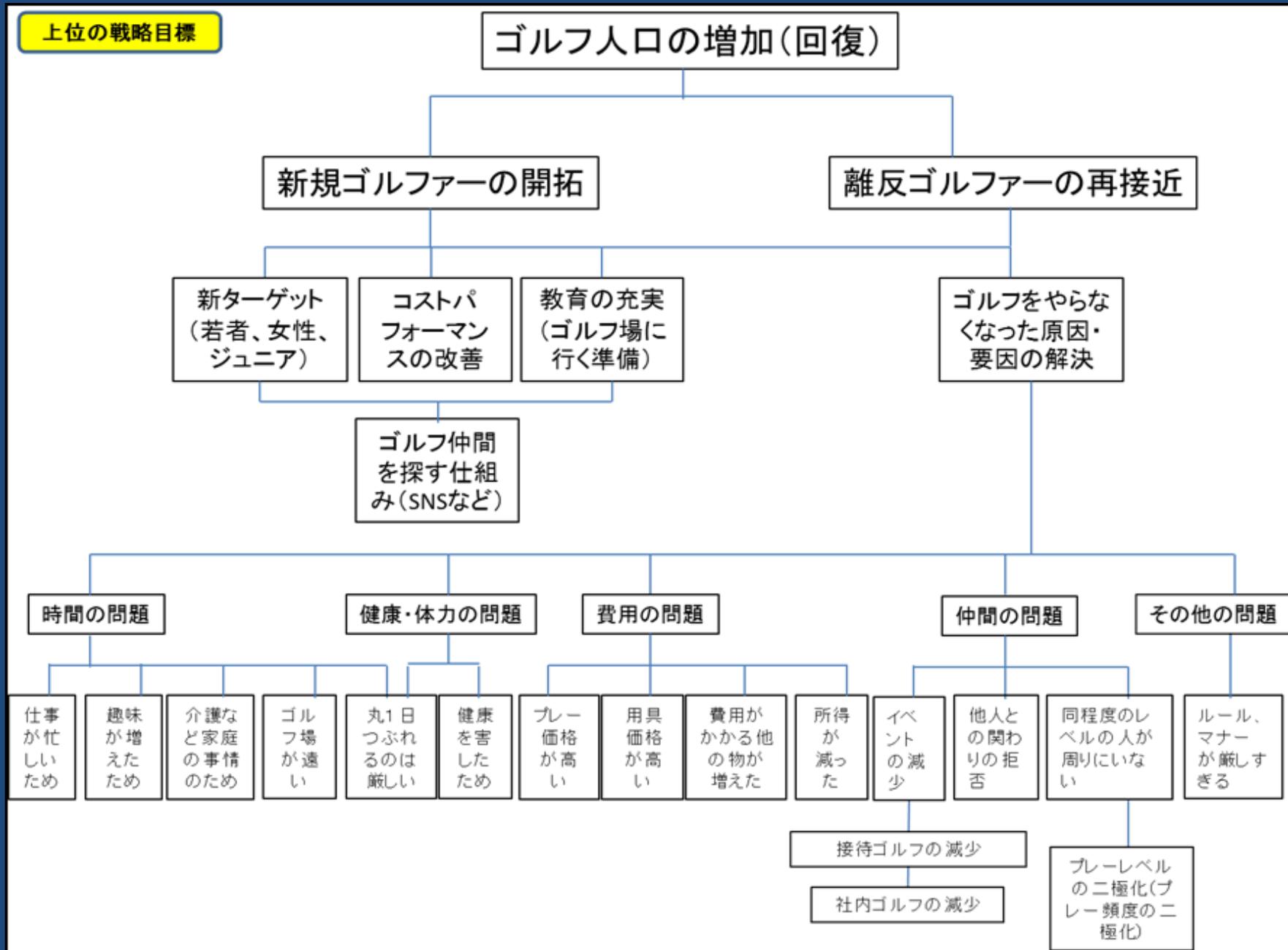
過去、新規ゴルファーの掘り起しに主眼を置いたゴルフ人口回復策が多く、離反者層（ゴルフをやめてしまった人）へのアプローチが行われていない。そのため、「ゴルファーの離反理由」については明確なデータが無く、不明な点が多い。

「なぜ、ゴルファーはゴルフ場から離れていったのか」という観点からゴルフの阻害要因と再接近の可能性を探るための仮説を構築し、離反者の再接近のための提言を示す

## 研究の経過

- ① ゴルフ離反者へのインタビュー調査  
(2011年11月～2012年8月)
- ② ゴルフ事業者(ゴルフ場及びゴルフ練習場オーナー)へのインタビュー調査(2012年7月～9月)
- ③ インタビュー調査をもとに「ゴルファーの離反理由とゴルフ人口回復に向けた仮説」(ロジックモデル図)構築
- ④ 仮説を検証するための定量調査実施

# インタビュー調査から得られた仮説



## 定量調査

### <調査対象>

過去には年1回以上のコースラウンドをしていたが、  
現在まで5年以上コースを回っていない、45歳以上  
の男性400名

### <調査方法>

専門会社に依頼し、インターネット調査を実施

### <調査期間>

2014年12月10日～2014年12月12日

## まとめ①: 約3割が再びゴルフに取り組む意欲がある

ゴルフ離反者の約3割が「ゴルフを再びやってみたい」(「またやりたいと思う」、「まあやりたいと思う」の合計)と回答

「ゴルフを再びやってみたい」と考えている割合が最も高かったのは「50歳～54歳」(41.2%)であり、次いで「45歳～49歳」(40.0%)。



この世代は、団塊世代と同様に出生時に200万人を超えている人口の多い年代(1971年～1974年)が含まれており、市場へ及ぼす影響も大きいと思われる。

## まとめ②: 主な離反理由は【お金】と【上達度】の問題

離反理由として、

- 1) 「プレーフィーが高い」、「用具価格が高い」、「所得が減った」など【お金の問題】が上位に挙げられた。
- 2) 次いで「うまくならなかった」という【技術レベルの問題】が多く挙げられた。



一般論的に、ゴルフ離れの大きな理由であるとよく言われてきた、「接待ゴルフ」や「社内ゴルフ」の減少、といった項目は想像したほど多くは挙げられなかった。

## まとめ③：現在のゴルフ環境は「生涯スポーツ」に不向き？

年代別に「ゴルフをやめた理由」を見ると、特に70代以上については「健康を害した」という回答が顕著に多い結果となった。



しかし、ゴルフはその殆どが歩く運動（打球時間は2～3分）であり、健康づくりの運動として推奨されてきた。また、ゴルフは「生涯スポーツの代表格」とよく言われてきたが、健康を害してやめざるを得なかった人が意外にも多い現状が明らかとなった。

# ポスト2020に向けた ゴルフ市場活性化への提案

# 提案①:「18-23問題」への対応

## <現状>

- ◆ゴルフ人口の約半数は50代、60代、70代。
- ◆中でも70代が最も多い(約200万人)
- ◆健康寿命から考えれば、2018年～2023年頃にさらにゴルフ人口の減少が深刻になる可能性(18-23問題)

## <提案>

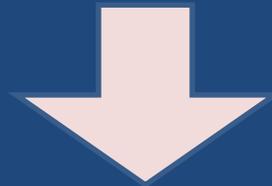
70歳を超えて、少々健康上の問題を抱えていてもゴルフを続けられる環境(カート乗り入れの問題、スロープレーの問題、高齢者にやさしいコース整備の問題、18ホールプレーに拘らない、等々)を整える。

「ゴルフ場におけるマナー違反の調査」(今回は2013年に実施)によれば、毎回「スロープレー」が第1位に挙げられる。確かに、プレイファストは大切ですが、これをあまりに厳しく言いすぎると、高齢者やビギナーはゴルフ場へ行き難くなることも懸念される。

年齢が高くなると動作も緩やかになるのは当然であり、ビギナーもラウンドに時間がかかる。この点についても、業界やゴルフをする人すべてが考えなければならない課題ではないか。

<第2回:「ゴルフ産業の短期的改革案」(2015年5月号)>

高齢者向けのゴルフ環境整備(アダプテーション)は、同時に、ビギナー向けの環境にもなり得る



- カートを乗り入れられる範囲の拡大
- ボールを見つけやすい環境の整備
- 扱いやすいボールや用具の新規開発
-  カップを大きくする



## ACCORDIA GOLF

18ホール全てのグリーンが  
直径15インチ(約381mm)の「でかカップ」に!

通常カップの約4倍、直径15インチ(約381mm)の「でかカップ」を18ホール全てのグリーンで使用する、「でかカップゴルフデー」は2016年6月に始まり、その後も全国に開催地を増やしております! ゴルフ初心者の方がラクにプレーでき、ベストスコア更新が狙えるのはもちろん、経験者・上級者ゴルファーにも、いつもとは一味違った新感覚のゴルフを楽しんでいただいています。

2016年度に開催されたイベントでは、「初めて100を切りました! 楽しかったです」、「もう少しでホールインワンでした。次は狙いたいです!」、「もっと頻繁に開催してほしい」、「友達にもすすめた



<第2回:「ゴルフ産業の短期的改革案」(2015年5月号)>

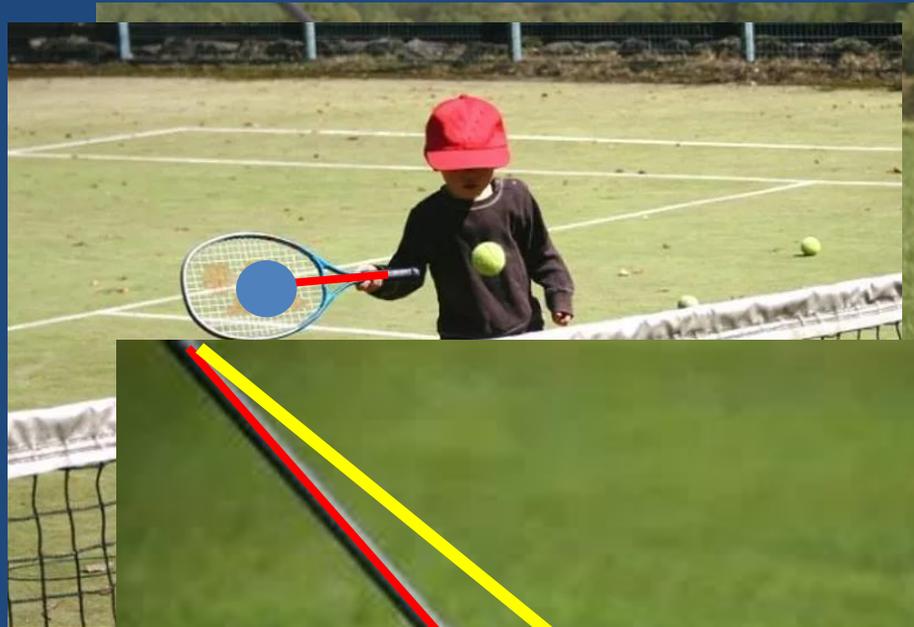
高齢者向けのゴルフ環境整備(アダプテーション)は、同時に、ビギナー向けの環境にもなり得る



- カートを乗り入れられる範囲の拡大
- ボールを見つけやすい環境の整備
- 扱いやすいボールや用具の新規開発
- カップを大きくする

# ゴルフの難しさの1つ

ゴルフクラブの打球面の重心がグリップ軸線上から離れた位置にある



# 黎明期のゴルフクラブはセンターシャフトだった

## 英国ゴルフ博物館に展示される約130年前のゴルフクラブ



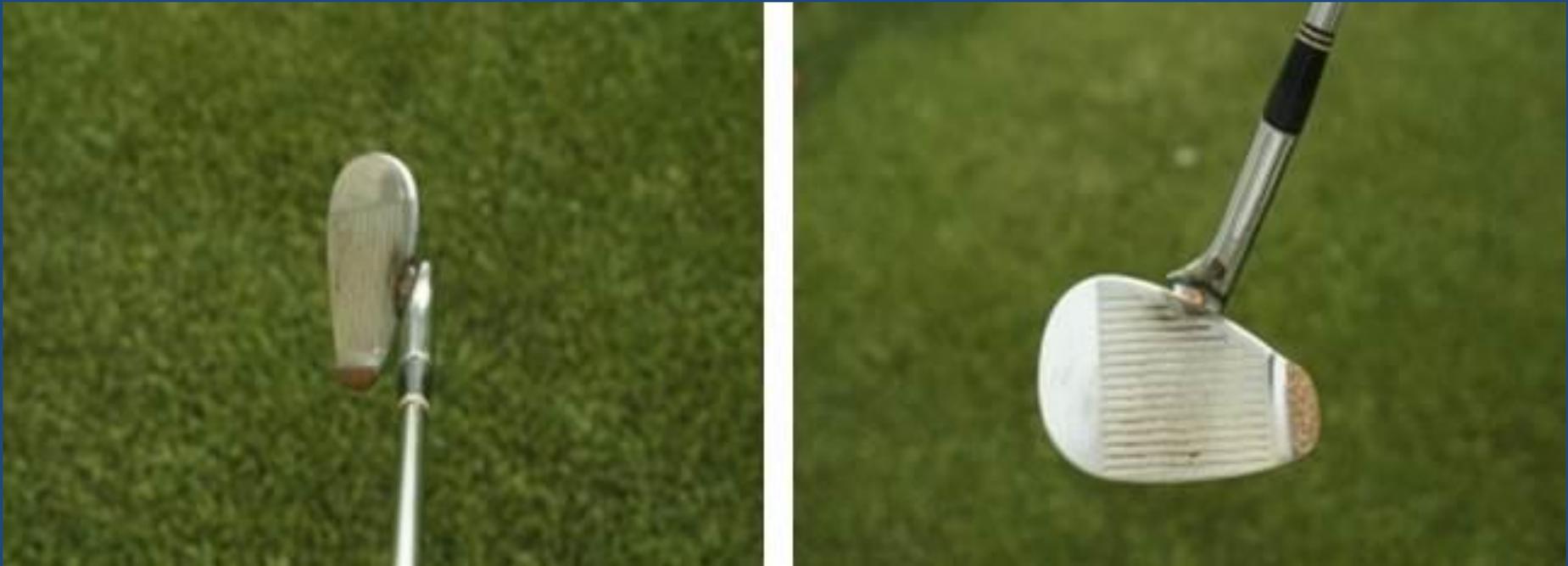
(撮影:北 徹朗)

1900年までは様々な形状のクラブが使われていたが、センターシャフトのクラブは難易度が低いことから、パター以外のクラブでの使用は禁止にされた(北ら、2019)

# 実践結果

## <クラブの試作①>

シャフトがセンター寄りに接続されたクラブのイメージを表現するために、中古アイアンクラブを切断・溶接し、プロトタイプを作成した



# 実践結果

## <クラブの試作②>

ブリヂストンスポーツの開発担当者とのミーティングを経て、アイアンクラブとドライバークラブを試作した



# 実践結果

## ＜アイアンクラブの改良＞

- ①ソールの幅を厚くした
- ②フェース面をできるだけ広くした
- ③ネックを曲げずに直接ヘッドに接続した
- ④ウッド(ドライバー)に近いアイアンへの改良を試みた
- ⑤グリップトレーナーの装着をした



## 提案②: 固定化されたイメージを払拭する情報発信

### <現状>

- ◆今回の調査では、ゴルフをやめた理由として、「プレーフィーが高い」、「用具価格が高い」という回答が上位2位
- ◆しかし実際には、会員権価格やプレーフィー、さらには中古市場の充実により用具用品も安価で購入可能

### <提案>

『ゴルフは(安価に楽しめる)身近なスポーツ』であることが浸透するような戦略のもと、情報発信をすることが必要。「おじさんのスポーツ」というイメージも未だに払拭されていない。

## 提案③：新規層の開拓に加え「もういちどゴルフを」の施策

### <現状>

- ◆新規層開拓に関する提言書やレポート
- ◆「ゴルマジ!」、「楽ゴル」、「ゴルフのたすき」、「たびーらスイーツゴルフ」等々、民間企業の取り組み

### <提案>

「新規ゴルファーの開拓策」とともに、『もういちどゴルフを!』といったスローガンで、「離反ゴルファーの再接近策」を見据えたゴルフ業界の取り組みも、ゴルフの人口問題に対する解決策の目のつけどころとして意義がある

「ゴルフを再びやってみたい」と考えている割合は「50歳～54歳」(41.2%)、「45歳～49歳」(40.0%)が高かった。出生数200万人超え世代(1971年～1974年)が含まれており、市場へ及ぼす影響も大きいのではないか。この世代を含め、離反者層がゴルフを再開するための条件などについて精査される必要がある。

## 提案④:ゴルフマナー(エチケット)の明確化・明文化(1)

### <現状>

- ◆ゴルフマナーを学ぶ場・書籍などが無い
- ◆ゴルフマナーの指標もない
- ◆エチケット、マナーの具体例が何かが曖昧な点が多い  
(明文化されていない)

### <提案>

- ◆調査や研究を踏まえ、現代的なゴルフマナーの指標を示すことはできないか
- ◆NGKなどの団体が学術レベルと共同でより実務的なゴルフマナーの指標を示すことができないか

## 提案④: ゴルフマナー(エチケット)の明確化・明文化(2)

	ゴルファー	ゴルフ場
1位	禁止区域での喫煙や喫煙自体が迷惑(15.8%)	スロープレー(25.0%)
2位	スロープレー(13.9%)	ドレスコード違反(21.0%)
3位	打ち込み(9.8%)	ボールマーク、ティボット未修復(10.8%)
4位	ショット時のおしゃべり(9.3%)	コースを汚す、ゴミを散らかす(9.9%)
5位	バンカーの未修復(8.5%)	バンカーの未修復(8.5%)

引用元:

北 徹朗(2016)「ゴルファーとゴルフ場支配人のマナー意識の相違」  
ゴルフの科学Vol.29, No.1, pp.56-57



ゴルフマナーの共通見解が無いことで問題やトラブルが起こることも多い

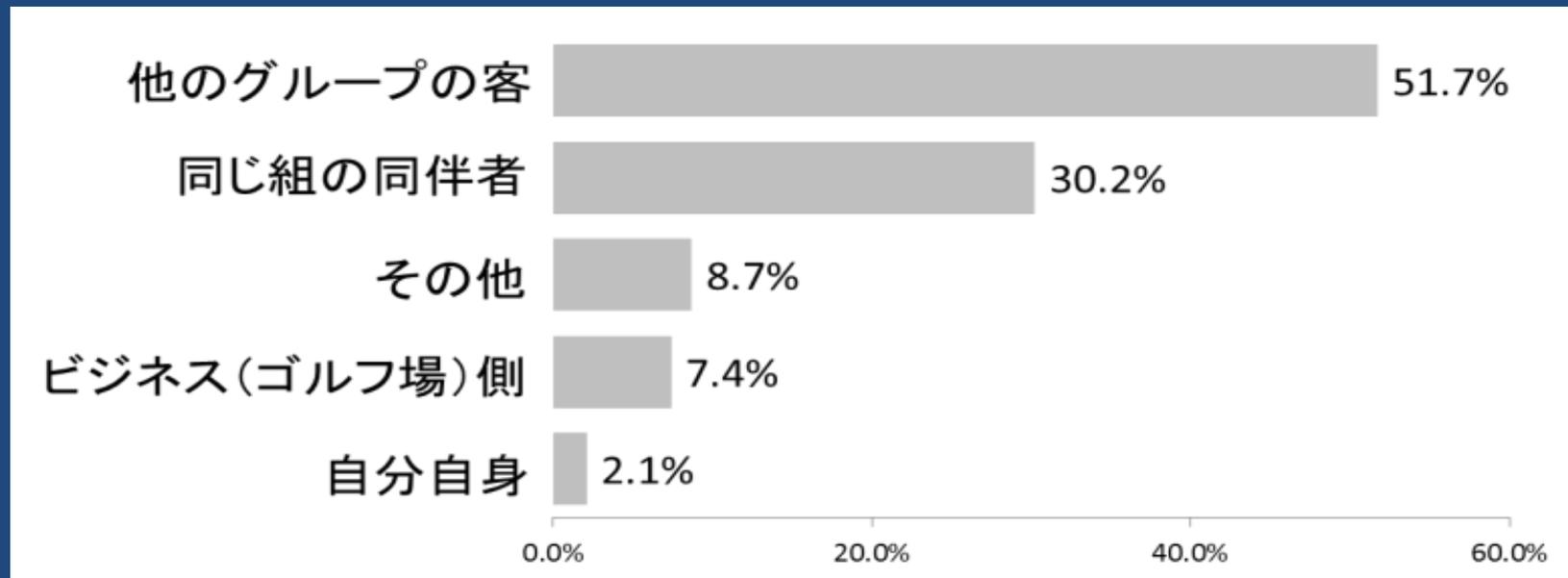
## 一般ゴルファーの「腹の立った経験」

Q. 「ゴルフ場で腹の立つ経験をしたことがあるか？」



A. 【ある 58.5%】(男性61.4%、女性41.4%)

## 一般ゴルファーが「腹を立てた相手」



引用元:

北 徹朗(2015)「学窓からみるゴルフ産業改革案7」:月刊ゴルフ用品界10月号,pp.70-71

## 提案⑤: 大学教育・大学体育との協同

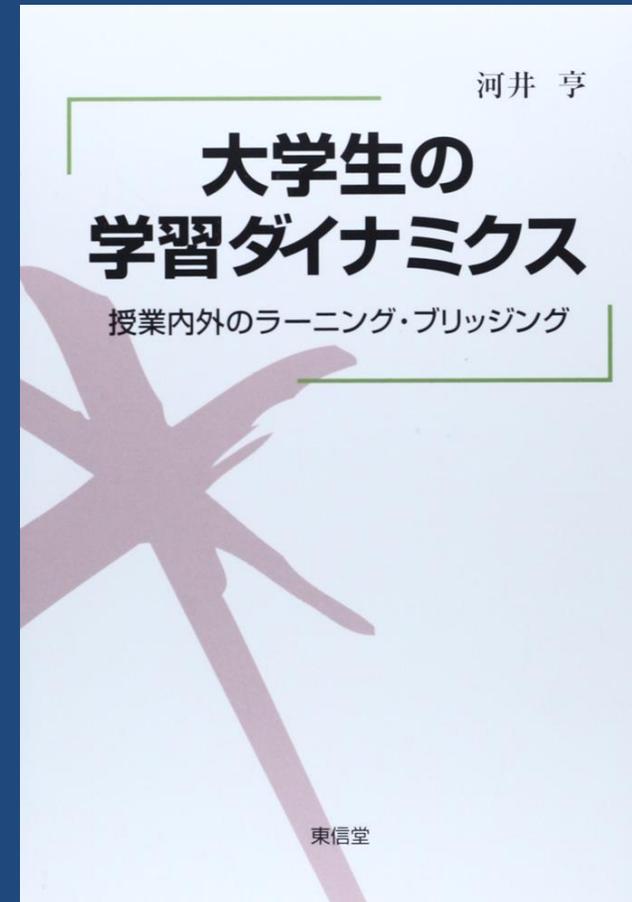
- ◆全国の大学体育において「ゴルフ」が扱われる授業は、581授業もある(北ら、2016)
- ◆他の種目の一例では、柔道47授業(川戸ら、2017)、ソフトボール280授業(北ら、2010)
- ◆大学教養体育における「ゴルフ授業」をゴルフ場で行うのは50授業程度(北ら、2016)
- ◆年間数万人～最大で10万人の大学生が体育授業でゴルフクラブを初めて握っていると推計(北、2016)

# 「ラーニング・ブリッジング」(河合亨、2014)

河合(2014)は、大学生の教育実践について、正課外での学習と正課授業での学習関係について報告。

授業と授業外の間を移行・往還しながらそれぞれの学習を結びつけて統合することを、「ラーニング・ブリッジング」として概念化。

正課外の実践コミュニティに足場を置いて正課授業での学習へとブリッジングしている学生が知識・技能の習得に関する得点が高い。



## この研究の目的

大学ゴルフ授業において「ラーニング・ブリッジング」を試行的に実践。

正課と正課外教育を一体化させた実践から得られた、副次的・波及的な効果について検討し、「広義の大学体育の価値」について考察することが目的。

# 大学ゴルフ授業受講修了者に対する課外教育プログラム

●多くの大学でゴルフは教材とされているものの、その殆どは学内での打ちっ放しで完結

●正課教育で学んだ知識や技術を、実際の現場で実践する正課外教育プログラム



企画名称：『Gちゃれ』

GちゃれのGは、Golf、Green、Gentleman、Grass、Grace、Good Golferなど、ゴルフに関連する用語をイメージ

# Gちゃれ(ゴルフ場体験)



4大学から33名が参加した第66回Gちゃれ  
(2018年12月27日、於:八王子カントリークラブ)

# Gちゃれの一日 ～八王子CCでの事例～

## ① チェックイン等、クラブハウスの利用を実践



## ②③④ 開会式・オリエンテーション、及び座学研修



## ⑤ 練習 (ショット、アプローチ、パッティング)



# Gちゃれの一日 ～八王子CCでの事例～

## ⑥ 昼食 ラウンドにあたっての注意事項



## ⑦ コースデビュー(1～4番ホール) ショットガンスタート



## ⑨ ふりかえり、閉会式



2015年8月、武蔵野美術大学生向けに開始したGちゃれは、

- 全国の大学が導入
- 各地で全80回以上開催
- 参加学生総数1200名以上(2019年8月現在)
- 大学ゴルフ授業研究会は一般社団法人化
- 研究会世話人150名以上

# 2016年6月27日：授業研究・市場調査がもたらした動きの一例

## 「大学のゴルフ授業」の充実を目指した 産学連携調印式



# 「大学のゴルフ授業」の充実を目指した 産学連携調印式



ゴルフ市場活性化委員会  
委員長 馬場 宏之

公益社団法人 全国大学体育連合  
会長 安西 祐一郎

スポーツ庁長官  
鈴木 大地

公益社団法人 日本プロゴルフ協会  
会長 倉本 昌弘

「大学のゴルフ授業」の充実を目指した  
産学連携調印式



公益社団法人 全国大学体育連合  
会長 安西 祐一郎

スポーツ庁長官  
鈴木 大地

公益社団法人 日本プロゴルフ協会  
会長 倉本 昌弘

# 安西祐一郎氏(当時、日本学術振興会理事長)の主張

2045年の学力(18) いまこそ、体育を必修に

安西祐一郎の  
2045年の学力  
「高大接続」に込めた思い



「高大接続」という言葉が独り歩きしている。目まぐるしく変わる世界で、私たちの子どもはどんな力を求められるのか、それにふさわしい教育を創っていこう。そんな思いで始めた改革だったが、その方向に進んでいるのだろうか。議論を進めてきた責任者の一人として、改革に込めた思いを語りたい

- 1、体力向上
- 2、コミュニケーション能力養成
- 3、地方創生に貢献可能

1991年、大学設置基準の大綱化によって、体育を専門とする大学・学部以外の多くの大学が、体育を必修科目から選択に切り替えた。大綱化に先立つ大学審議会答申では、開設授業科目と卒業要件について、次のように記している。その記述から、大学審議会が体育を目的にしていたわけではないことを読み取れる。

- 開設授業科目については、大学設置基準上、一般教育科目、専門教育科目等の科目区分は設けないこととし、大学は、当該大学、学部および学科の教育課程を編成すること、教育課程の編成に当たっては、学部等の専攻に係る専門の学芸を教授するとともに、幅広く深い教養、総合的な判断力を身に付けさせ、豊かな人間性を涵養するよう適切に配慮することという趣旨を規定することとする。
- 学生の卒業要件については、学生が修得すべき最低の総単位数を規定すると定めることとする。
- この場合、大学の学則では、教育上の必要に応じた適宜の名称で授業科目を区分し、これに応じた最低修得単位数を定めることができるようになるが、従来のように大学で開設する授業科目を専門教育科目、一般教育科目、外国語科目、保健体育科目等に区分し、従来と同様の最低修得単位数を規定することも可能である。

となると、大学生が体育を履修することは「意味がない」と考えたのは、大学教員たちなのだろう。私自身も、会議の席で「体育を選択にする」と聞いたときには、「もったいないな」と思った程度だった。  
大学での体育の授業は面白かった。剣道の授業があって、中学で剣道部だったから、まったくやったことのない

## 2017年6月19日付 読売教育ネットワーク 「いまこそ体育を必修に」

※以下、60～71行目の記述

たとえば今、東京の八王子周辺で、大学とゴルフ場が一緒になって大学の体育の授業にゴルフ場を開放するとともに、地域コミュニティの活性化に役立てる動きが出ている。

(中略)

地方創生の新しい方向をうみ出していくことが期待できる。

## 発表のまとめ：ポスト2020に向けて

- ◆2016年、リオ五輪から正式種目に112年ぶりにゴルフが復活
- ◆同年、「大学体育へのゴルフ場開放元年」(Gちゃれ)となった
- ◆高齢者向け環境整備は初心者向け環境にも適合する可能性
- ◆高齢者向け環境整備は離反者の再接近環境にも適合可能性
- ◆ゴルフ業界×大学×地域の協同実践の可能性 .....など



**【手段としてのゴルフ論】**や**【何かの目的の下請け的な発想】**でのゴルフ活性化施策は有効性が低い

過去20年間繰り返され  
今だに有用性が高いとされることの多い、  
ゴルフ人口増加に向けた提言や発想の一例

- スター選手(強い選手)育成が人口増加に繋がる
  - ゴルフをやるとマナーが身につく
  - ゴルフをやると礼儀作法も身につく
  - そのようなゴルフを社会人はやることが望ましい
  - ゴルフをやると健康になる、認知症にならない
- ……………等々

【手段としてのゴルフ論】や【何かの目的の下請け的な発想】ではなく、**ゴルフそのものが「楽しい」「またやりたい」と**思えるような環境整備を考えるべき